

## アンドレ・ジツドの方法 (VI)

『田園交響楽』をめぐって

陶 山 曠

一

『田園交響楽』は、シンフォニーでなく、ソナタだと批評家はいう。広い開かれた田園でなく、閉ざされた庭園の風景ともいえる。「三日も降りやまない雪」に閉じこめられ、「この蟄居」を利用し、「過去をふりかえり」、村の牧師が日記を書き始める。日記は、一八九×年二月十日に始まり、その年の五月三十日に終る。語られる物語は、期間三年。しかし日記の終りの方では、作中人物の現在となる。過去から現在へと走り去るこの物語を、まず、私なりに追ってみよう。

### 《現実と夢》

アルプスに近い僻村の牧師が、身寄りのない盲目の少女をひきとる。

ある夕景、死にかけている老婆のもとへ、牧師は馬車を走らせる。その方面は、村を知りつくす彼も、あまり立寄ったことがなかった。「神秘的な小さな湖」を、「夕景の美しいばら色と金色のなかに」突然みとめたとき、彼は「かつて夢の中で見た風景」かと思ったほどだ。廃屋から「一すじの細い煙が薄闇の中に青く」立ちのぼっている。その

あばら家で、すでに往った老婆のかたわらに、貧しさと悲惨の中にいる盲目の少女に出会う。彼女は魂のない肉塊、目が見えず言葉も知らず、何の表情もあらわさない。生きていることは、かすかな体温が伝わってくることでわかるだけだ。

牧師は、突然の啓示、「神に対する崇拜と愛」のためこの娘をひきとる決心をする。唐突で恣意的な決断。家に戻ったときの妻の最初の言葉は、「また何をしょいこんでらしたの、いったいこれをどうするおつもりなの。」この「中性的な呼び方」に牧師の心は傷つくが、彼自身も娘を「肉塊」と思っていた。

現実が彼の神秘的な夢想をさえぎる。盲目の少女、ジェルトリュードの教育も、「現実に合わせて」夢は破れる。彼女は、何日も完全な無表情を続ける。そんなとき、友人の医師マルタンが訪れ、盲人の臨床例を教える。ピンとペンという二つの点字と実物を、同時にふれさせる。これをくりかえし、最後には言葉に結ぶ。牧師は、忍耐強くこの方法で教育した。ついに少女の顔に最初の微笑が浮ぶ。その微笑は、

「アルプスの高地で、曙の光にさきだち、雪におおわれた頂上をくつきり闇の中からひき出し震えさせる、緋色があった微光のような、突然さしくる光のようだった。神秘的な色彩とも言えたる<sup>(1)</sup>。」

#### 《二つの世界》

牧師は、少女をつれて戸外を散歩できるようになる。彼女は、小鳥の鳴き声を聞いたとき、頬や手に心持よく感じられる熱と同じと思えた。それを光の作用と想像していた。熱い空気が歌いはじめたのだ。それは、火にかけた水が煮えたつと同様、きわめて「自然なこと」と思った。生きものは、「自然」の中に散らばっている喜びを表現しよう<sup>(2)</sup>とあのかわいらしい歌声でさえするのだと、牧師はそれにつけ加える。また鳴かない蝶の喜びは、羽の上に多彩な

色模様で描かれていると説く。

しかし、ありのままの自然は、これ程、美しく喜びはあふれたものでない。動物や鳥や昆虫の世界は、本能だけでいとなまれ、生々しく残酷なものだ。にもかかわらず牧師は、ありえないと思うような自然、今ひとつの自然を少女のために作りだすようだ。自然の本能の否定の上に成立する人為的自然、感覚があくまで美しさだけを感じるような自然をつくりだしてゆく。その世界は、非日常的で非現実の「神秘的色彩」で描かれる楽園、あるいは復活後のそれであるようだ。

#### 〈愛の変貌〉

牧師は、ジュルトリュードを音楽会につれて行く。『田園交響楽』を聴いた彼女の感嘆に、牧師は当惑する。シンフォニーの『諧調は……ありのままの世界を描いたのではなく、ありえたかも知れぬ世界』を描いたものであるから。そして、この「悪と罪が存在しない」盲目の少女の世界に、新たな感情がめざめる。「交響曲の中で、調子はずれじゃないかしら」と自分の美しさを牧師にたずねる。

その後、夏休みで帰宅した牧師の息子と少女のあいだで事件がおきる。ジャックは、密かに、彼女にオルガンを教えていた。「立ち聞き」をし、覗くことでこれを知った牧師は、詰問する。ジャックは、恋の告白をし、結婚の意志を言う。そのとき父親は、自分の嫉妬心に驚く。息子の考えは、「自然で当然で」ある。だが「ある一つの本能」がどうしても結婚を承諾させないのだ。父の反対で、ジャックは諦らめ去っていく。

この夏の日、ジュルトリュードをつれて牧師は散索する。美しい自然を前に、盲目の少女は、情景を想像し描いていく。

「……足もとには、山の書見台に立てかけた開いた本ののように、まだら模様のある緑色の大きな牧場が広がって

ます。影のところは青ずみ、日向は金色に輝いています。そして、花が……文字を書いています<sup>(2)</sup>。」

盲人の自然描写は、美しくさらに続く。このありえない自然の中で、ジャックを愛していないと牧師に伝える。その理由のように、「めくらの娘と結婚する人なんてありませんものね」という。そして牧師への愛を彼女は告白する。それは、奇妙な論理で告白される。彼女が生きる盲人の世界と現実の世界を区別し、それとの愛の関わりを否定しながら、牧師への愛を告白した。それは、牧師だけは、彼女と同じ今ひとつの世界を生きっていると、ジェルトリュードは思い、牧師もそう錯覚しているからかも知れない。

#### △愛の結実▽

日記は、第二の手帳に入る。牧師は、今までの記録を読み返し、自己の心の動きに、今さらの様に気づく。恋は、非難すべきものゆえ、魂を押しひしぐ、と彼は考えていた。それまで、魂の重荷を感じなかったもので、これが恋だとは思っても及ばなかったと彼はいう。

ジャックは、彼女を諦らめたようだ。彼は、あてつけのように、少女の聖餐式に欠席した。母親も同様だった。家族二人の離反にもかかわらず、父親は、自分の行為を肯定しようとする。妻には、日常的凡庸さを批判、息子に対しては彼の思想を批判する。

「……キリスト教信仰を形づくる多くの概念は、キリストの言葉より、聖パウロの教義にもとづいているように思われる。……これが、ジャックとした議論の主題だった<sup>(3)</sup>。」

牧師にとって、戒律や威嚇や禁止は、聖パウロからでている。彼は、福音書のなかに「至福の生」を求める。ジャ

ックは、「魂の服従」しか求めないと牧師は思う。牧師の祈りは、「主よ、愛に属さない全てを、わたしの心から除いて下さい……」となる。父の世界は、全ての禁止から解放された少女との愛の世界。そのかたわら、ジャックの禁欲的世界も、実のところ、父親につくられたものだ。牧師には真実が見えない。

「ところで、ジェリユトリュードの輝かしい空を、（聖パウロに関わる）こんな複雑な問題で乱してよいものだろうか。……他人の幸福をそなたたり、自分自身の幸福をあやうくすることこそ罪だ……。」

春、雪どけの道を二人は散歩をする。物語は、すでに現在だ。少女は、自分の幸福が「無知」の上にきずかれていないかと疑う。二人の愛が罪ではないかと案ずる。そして、牧師の子を産めるかどうかとたずねる。彼はうろたえる。子を持つためには結婚が必要だ。この答えも彼女を納得させない。うつろにひびく牧師の言葉、

「だが実際は、人間や神の法則が禁じていることを、自然の法則は許しているのだ」<sup>(5)</sup>

牧師が「神の法則は愛の法則だ」とよく話してくれたと少女は抗する。その愛とは慈悲のことだという答えに、少女は、二人の愛は恋であり罪だとはつきり言う。続く少女の言葉は、「でも、あなたを愛することはやめられませんわ。」

その翌晩、二人は、いだきあう。

△崩壊▽

ジェルトリュードは、マルタン医師の世話で、ローザンヌの病院に入院し、手術は成功する。目は開かれた。彼女

の帰宅。しかしそれは、思わぬ悲劇で終る。彼女は、庭園の小川に落ちて流される。肺炎の並発。彼女は、小川に生える勿忘草をつもうと思ひ、距離の目測に慣れないせいか、それとも水に浮んだ花毛氈を固い地面とまちがえたのか、不意に足をふみはずしたとはじめ思われた。少女は、見舞う牧師に、川べりでつもうとした「あの青い小さな花」をつんで来るようたのむ。

しかし、事実は違っていた。ジェルトリュードは、自殺を試みたと告白する。目が開き、自然が、かつて想像したよりはるかに美しいことを彼女は知った。同時に、人間の額がこんなに憂いにみちていることに気づく。彼女が知ったのは、「二人の罪」であった。たしかに「もし盲目なりしならば、罪なかりしならん」であった。目が開かれた時、パウロ書簡の次の一節を彼女は知った。「かつて律法なくして生きたれど、誠、命きたりし時に、罪は生き、われは死にたり。」ジャックが読み聞かせたのだ。彼は、カトリックに改宗していた。少女は、自分の罪を知るとともに、愛していたのはジャックだと気づいたのだ。牧師の顔と想像していたのは、ジャックの顔だったと嘆く。彼女は、罪と、ジャックとの閉ざされてしまった愛の道を知り、死を選んだという。

二人の人間が、同時に牧師を見捨ててしまった。悲嘆のなかで、なぐさめをもとめる夫に、妻は、主の祈りの切まり文句を、とぎれがちにとなえる。聞きながら、牧師は、心が砂漠よりかわいているのを感じていた。

一一

『田園交響楽』は、「簡潔であり濃縮された」<sup>(6)</sup>作品である。さらに、以前のレシ系列には少ない「レアリスムに対する配慮」<sup>(7)</sup>のある作品でもある。作中人物とその行動は、「日常的であり、一般の人間のそれに近い。」したがって、ハ物語Vだけを追うと謎の少ない、わかりやすい作品といえる。

C・マルタンは、ジッドのレシにおける形式を次のように比較した。<sup>(8)</sup>『インモラリスト』においては、主人公ミッシェルは、彼自身の物語を自分の声で友人達に語る。『せまい門』では、ジェロームがアリサの物語を書く。『イザベル』では、ジェラルドは、彼が証人である物語を友人達に語る。そして『田園交響楽』では、牧師が彼自身の物語について日記をつける。『せまい門』では、「アリサの日記」が附帯するが、日記だけという形式は、それまでなかった。

では、物語と日記はどのように違うのだろうか。H・マイエによれば、<sup>(9)</sup>物語の時間は、連続する日付につれて過去から語られ未来の方向にむかう。対して日記の時間は、現在から語られ過去にもどる。日記には、書く者の現在がそこにある。F・プリユネは、<sup>(10)</sup>その現在を、一九一六年ごろからのH・ゲオン改宗を期としたジッドの宗教的危機、そして一九一八年の執筆時を頂点とする作者の恋愛問題と夫婦関係の危機の二つに位置づけて、彼の論を展開した。すなわち、この作品は、「ジッドの全作品中、伝記的要素にもっとも培われた」<sup>(11)</sup>ものだといえる。この伝記的要素をマイエは、とりわけ作者執筆中の現在とのかかわりからとらえ、作品の構造へのその波及を分析した。このレシが、作者の内的論理により、必然的な動きをし、その技法を決定し、結果「日記」となったとマイエは論ずる。

さて、この二論を展開させた宗教的危機と、人生的危機とは何であるかを、簡略におってみよう。

一九一六年一月一七日、友人ゲオンは、「いよいよ一線を飛びこえた」との手紙をジッドによこす。友は、カトリックに改宗した。その後一年のジッドの日記は、苦悩を示す語で満たされる。

「欲念の焰……性的好奇心……陷穽に満ちた一日……罪の重みが私を引きずって行く……狂癖……絶望的にこの手帳にしがみつくと……最高の空が地獄と相接する一点……悪魔が私に言った言葉……再び墜落……自分について思い出されるすべては、私をぞっとさせる……私は天国を諦めていた、もはや地獄に抵抗できなかつた……まさしくシ

ジフォオスの岩だ……」<sup>(12)</sup>

そして、その年の末、

「ああ、一九一六年という不幸な年の最後の日にも、あの過去は、すっかり清算することが出来なかった。」<sup>(13)</sup>

翌年、ゲオンは死んでしまった以上に、自分から遠い存在になってしまったと、彼は嘆く。かたわら、宗教的問題について『緑の手帳』、後の『汝も亦……』に記していく。この内容は、『田園交響楽』中の、牧師とジャックの論争に酷似している。それを要約すると、次の一節になるだろう。

「永遠の生命は、単に未来のものではない。今まさに、私たちの中に現存している。死をうべない、永遠の復活を許す自己放棄に同意した瞬間から、私たちは永遠の生命をうける……」

△幸福ならんV(ヨハネ13・17)ではない……△幸福なりVだ。<sup>(15)</sup>

ジッドは、キリストの愛のなかで、今、この瞬間に、幸福にいたることを願う。だが、教義の中にふみ入れれば入る程、彼の願いは遠のく。この手帳の結論は、牧師の「ジュルトリュードの輝しい空を、こんな複雑な問題でみだし……暗くしてよいものだろうか」に呼応する。そして結論は、

「私の思考の確信が達しうる……境界線となる最後の言葉、△善しとする所につきて自ら咎なき者は幸福なりV」<sup>(16)</sup>



翌、一九一七年、ジッドは『一粒の麦もし死なずば』を執筆中である。三月八日過、ただ「月曜日」とされる日記の一節、

「Xの霊につかれて、荒涼たる悲しい一夜。彼の身体がほとんど感知され……散歩したり、彼の胸にすがって地獄の階段を降りたりした。<sup>(17)</sup>」

そして八月に入ると、ミッシェルという名がくりかえしあらわれる。そこではジッド自身は、ファブリスとなる。

「……ファブリスは、(ミッシェルの姿に)見惚れながら、長いあいだ、時も所も善悪も私自身さえ忘れていた。芸術作品にも、これほど美しい表現があったかしらと彼は疑った。<sup>(18)</sup>」

秋から冬にかけて、「生きることが、これほど楽しいことはなかった」とも彼はもらす。この青年から一通の手紙をうけとったときには、「見るものすべてが……美しく思える。生きること、こんなに激しい喜びをいただく」と浮ついた想いをつける。「どうしたらいいだろう、自殺だってできる……頭がぐらぐらするような幸福」と、この恋の記述は続く。十二月、彼は、ホモセクシュアリテ擁護論『コリドン』を書き始める。<sup>(19)</sup>この作品は、年を越してすぐ、一九一八年一月にほとんど仕上る。<sup>(20)</sup>

そして二月、『田園交響楽』の執筆が始まる。

「四日前から『盲目の少女』に没頭している。ずいぶん前から頭にあった題材で……。下書なしにうまく書けるよ

う努力する。そしてたちどころに二十頁程書いた。<sup>(21)</sup>」

三月一日には、四十五頁まで書き進み、「早く仕上げたい」と思う。この年も、ミッシェルとの愛は続く。「Mなしですますことは、もう不可能だ、私の青春、それは彼だ。<sup>(22)</sup>」『盲目の少女』は、もう第一部をおえようとするなか、六月十八日、彼は恋人と英国旅行に発つ。執筆は中断し、作者自身の現実のドラマがはじまる。

「何とも表現しようのない苦悩を抱きつつフランスを去る。わたしの全過去に永遠の訣別を告げるような気がする。<sup>(23)</sup>」

残された妻は、夫の不在中、彼との書簡の全てを焼く。

十月十日、帰国し、ジッドなキュヴェルヴィルの家に戻った。彼は、こう記す。

「私の思考を正しくつかむことはめんどろ、それより詩的状态にとどまりたいと思う……それに対して戦かう。

つきまとう死の恐怖、大地が足の下で突然くづれる。私は、生命を熱愛している、しかし、それを信じてはいな

い……<sup>(24)</sup>」

この短い文のなかに、ロマン主義と古典主義、生命と死、そして彼の熱愛する幸福な世界のもろさをも含めた、ジッドの世界がかいまみられる。『田園交響楽』に再びとりかかることに、彼は嘆く。

「(この作品の) 主題が要求する微妙で、陰影ある一種の完璧さは、私が今、実現しようと夢み、かつ望んでいるものとは遠いだけに、この仕事に再び専念するのはむづかしい」<sup>(25)</sup>

そして数日後、

「仕事を再開するのが、こんなに難しいとわかっていたら、六月に、あんなに安易に手離しはしなかっただろうか。でもあのとき、……できたろうか。……抵抗しがたい宿命が私を前に急がせていたのだ。Mに再び会うためには、全てを犠牲にしたろう。……何かを彼のために犠牲にしているとは、気付きもしないで、……牧師の精神状態に再び興味を持つとうとするがだめだ」<sup>(26)</sup>

にもかかわらず、十月十九日、作品は完成する。

「……こんなに早く『田園交響楽』の終りに来てしまったのをみて、不安になる。全体の均衡から言えば、もっと広く展開しそうなのに、主題がまさにつきてしまったような気がするのだ」<sup>(27)</sup>

しかしかたわらジッドは、作品執筆中、すでに夏前から、この作品の価値について次のような言及をくりかえす。

「審美的な観点が、私の作品を正しく語るための唯一の出発点……」<sup>(28)</sup> (四月二十五日)

作品完成まぎわには、

「芸術的見地こそ、私が書いたものを批評するに適當する。」<sup>(29)</sup>

作品が終った後でも、

「技巧の興味以上に何が残るだろう。」<sup>(30)</sup>

この作品の「主題」は、現実の冒険、伝記的事実によりつきてしまい、確かに技巧、芸術だけが残るだろう。H・マイエは、これをうけて、作品の構造と技法について、作品と同時におきた伝記的事実とからませて、彼の論を展開した。だがすでに、現実のドラマ以前の執筆中、四月二十五日に、作者は、作品の鍵がそこにあることをほのめかしている。『日記』が、『にせ金つかいの日記』の役割をしているとすれば、このほのめかしの中にも、ジッドの△技巧Vのにおいがしないでもない。私は、彼の芸術的事実の方に観点をうつし、今一度、作品を私なりにあゆみ、主題と芸術のかかわりをみてみたいと思う。むしろ、主題はつきていないと私は思う。

三

作品中の時間の流れは、奇妙だ。日記の日付の第二日目に、「昨日、書き始めた」<sup>(31)</sup>とある。その日は、二月二十六日、第一日目は二月十日である。これを単なる誤りとしても、ずっと後の方、ジェルトリュードが手術をうけるため

入院した日、五月二十日に牧師は、「二十日たかねば退院できない」という。六日十日の予定のはずだ。ところが、少女は、五月二十八日に戻ってきた。作者は急いだ。牧師が、自己の心の真実に気づいたとき、少女との恋に気づいたとき、日記は、まさに彼の生きているドラマに光をあてるために語られる。第一部は、過去を中心とした物語であるが、序々に日記の現在が広がり、第二部では、あわたましい現在の記述となる。マイエは、この変化を、明細な表にし明らかにした。

しかし、このようなあわたましい展開は、過去のレシにないわけではない。『せまい門』<sup>(32)</sup>では、シーンは、映画でのように連続し、つづいていく。P・トラアルは、この映画的手法について言及している。『田園交響曲』の多くの技法は、ジッドの他のレシで親しいものである。レシというジャンルに物語をおさめるために、「先取り」や「劇中劇（中心絞）」は、いたるところに散見される。

マルタン医師との最初の会話に、ディッケンズの『ろばたのこおろぎ』が話題にのぼる。貧しい玩具作りの父親が、めくらの娘を幸福の幻想の中に住まわせておく物語。そして、感覚は、人間を悲しませるだけではないかという疑問。ジェルトリュードの最初の微笑にあらわれたものは、「理知より愛情」であった。後ののアガベからエロスへの愛の変貌を暗示する。少女への教育の方法、「測距儀を使うやり方」で、目の開かれた少女は、「距離の目測になれないせいか」入水したと思われた。物語の進展前に、少女がルイズ・ド・ラ・M嬢の屋敷に住むようになったことが、そつと読者に知らされる。ジャックは、少女への愛を告白するとき「お父さんの奇妙な思いちがい」と父の非難をかかわす。これは、牧師の嫉妬心をやゆしほのめかす。牧師自身、それとわからぬ自分の感情を告白し、妻には「自分の欲望に気づかないのは、年をとってからも同じ」と謎めいていわれる。第一部ですでに、レシを成立させる「省略と要約」<sup>(33)</sup>の方法が、網の目のようにはりめぐらされている。

さて、今ひとつ、美しくもかつ作品の悲劇をきわだたせるものに入色彩Vがある。牧師は、福音書のなかに色彩の

記述がないことを不思議に思う。色彩は、盲目の少女にとっては、想像の世界である。

少女がいたあばら家への道すじ、「ぼら色と金色のなかで」神秘的な湖が見出され、その家からは「青くつづいて金色の空へ黄色く」煙がたちのぼる。ジェルトリュードにうかんだ最初の微笑は「緋色がかった微光のように、突然さしくる光のような」と形容される。そして地上の喜びを表現するため、蝶の羽の上には多様な色彩がえがかれているのだ。シンフォニーを聴いたとき、少女の理解しうる音と見えぬ色彩についての牧師の説明は、むしろ∧色彩の世界∨が、日常の現実とは別の、想像の世界になることを証す。牧師は、この二つの世界がいかにへだたっているかを、今さらのごとく気づく。また、交響楽の世界が、現実の世界かと少女に問われ、牧師は、自信なげに想う。

「(シンフォニーの) 諧調は、実はありのままの世界を描いたのではなくて、もし悪と罪とがなかったら、ああもあつたらうか、こうもあつたらうかという世界を描いたもの<sup>(34)</sup>だ。」

色彩、あるいは想像の世界は、ここで倫理的な意味をもちはじめた。「もし盲目なりしならば、罪なかりしならん。」盲目の少女の世界は、現実の世界とは別の今ひとつの世界、そこには罪が存在しない。いや、罪が犯されたとしても罪とならない。あるいは、アモラルの世界ともいえる。少女が「どうして、わたしたちは愛しあつてはいけな

いのでしょうか」とたずねたとき、牧師の答えは、大胆に、「愛の中に、悪いものは決してない」であった。

∧色彩∨が、∧二つの世界∨をくつきりときわだたせていた。同様に、作品中には対立するいくつかの世界がある。まず、アメリカに象徴される∧日常∨である。牧師は、日常に対して、異常なまでに子供っぽく挑戦する。次に、ジャックとの間に、少女をめぐる問題の中で、序々につくりあげられた思想上の対立する世界。そこで牧師は、興味深い内省をする。ジャックの恋愛についてこう思う。

「……一晩中考えても（ジャックの恋が）……きわめて自然であり、当然なものと納得した。それなのに不満な気持ちがいつそう強くなる<sup>(35)</sup>。」

さらに、こうもつけ加える。

「……良心の意識と同様に確かな今一つの本能が、この結婚をやめさせなくてはとささやいていた<sup>(36)</sup>。」

きわめて自然であることとは、日常性でもあり、神にゆるされた自然な結婚でもある。他方、ジェルトリュードが牧師の子をもちたいと、神にゆるされた結婚以外でも子は生れることを知っているとのほめかすとき、彼はこうこたえる。

「人間や神の法則が禁じていることを、自然の法則はゆるしているのだ<sup>(37)</sup>。」

このばあいの $\wedge$ 自然 $\vee$ は、いくぶん矛盾した意味をもつ。神のゆるさない法則も、人間の法則である。結婚のない男女の愛も、自然性にもとづかれている。これも自然だ。そしてさらに、それ以外の自然の法則がありえて、許されることもある。この短い一節の中で、ジッド自身の抱く $\wedge$ 今一つの自然 $\vee$ を読みとることは、不当だろうか。対立する世界とは、人間の $\wedge$ 自然 $\vee$ とジッドの $\wedge$ 反自然 $\vee$ と考えられないだろうか。

ジッドのレシの世界は、作者のいうよう<sup>(38)</sup>、『インモラリスト』は個人主義への、『せまい門』は神秘的傾向への、『イザベル』はロマン主義への、『田園交響楽』は自己に対する嘘への批判かも知れぬが、それ以上に、共通する主

題は、対立する二つの世界ではないだろうか。人間が自然性と考えているものに対する批判、ジッドの△反自然∨の世界の△言葉∨による構築の努力、そしてその崩壊の悲劇ととらえられないだろうか。

「神の法則は、愛の法則そのものだ」という牧師の言葉は、すでに、彼がとらえられている神を否定している。矛盾は、否定と考えよう。ジェルトリュードは、死を前にして、くづれ去る今一つの世界を象徴する色彩を、最後に求める。

「あの青い小さな花……あの空色をした花をとってきて……」<sup>(39)</sup>

牧師が願ひ、ジェルトリュードと共に作りあげた世界は、あるいは△反自然∨は、瞬間ともいえるある短い時間、芸術によりかろうじて成立し、そしてくづれ去る。くづれ去る崩壊の記述は、早いのが当然だろう。言葉のむなしさは、アメリーの月並みな「主の祈り」の言葉に深くしるされている。そして、残るものは荒涼とした砂漠である。しかし、芸術により、かろうじて作品は成立していた。

## 註

- (1) La Symphonie Pastorale (Livre de Poche) p. 42
- (2) Ibid. p. 142
- (3) Ibid. p. 112
- (4) Ibid. p. 121
- (5) Ibid. p. 137
- (6) Clade Martin : La Symphonie Pastorale d'André Gide p. 24
- (7) Ibid. p. 29



- (8) Ibid. p. 25
- (9) Herri Maillet : La Symphonie Pastorale d'André Gide p.p. 30—31
- (10) Francis Pruner : La Symphonie Pastorale d'André Gide
- (11) H. Maillet p. 26
- (12) Journal : 1916. 1. 17...1. 8...1. 19...1. 20...1. 24...1. 25...2. 7...2. 14...2. 16...9. 20...10. 3
- (13) Journal ( I ) 1916. 12. 31 p. 586
- (14) Ibid. 1917. 5. 19 p. 627
- (15) Ibid. 1916. 2. 18 p. 591
- (16) Ibid. 1916. 2. 21 p. 593
- (17) Ibid, 1917. Lundi p. 621
- (18) Ibid. 1917. 8. 21 p. 630
- (19) Ibid. 1917. 12. 15 p. 641
- (20) Ibid. 1918. 1. 7 p. 643
- (21) Ibid. 1918. 2. 20 p. 646
- (22) Ibid. 1918. 5. 4 p. 652
- (23) Ibid. 1918. 6. 18 p. 656
- (24) Ibid. 1918. 10. 10 p. 657
- (25) Ibid. 1918. 10. 12 p. 658
- (26) Ibid. 1918. 10. 16 p.p. 658—659
- (27) Ibid. 1918. 10. 19 p. 659
- (28) Ibid. 1918. 4. 25 p. 652
- (29) Ibid. 1918. 10. 13 p. 658
- (30) Ibid. 1918. 10. 26 p. 660
- (31) La Symphonie Pastorale (Lirre de poche) p. 27

- (32) Pierre Trahart : La Porte Etroite p.p. 69—70  
 (33) H. Mailet p. 36  
 (34) La Symphonie Pastorale (Livre de poche) p. 58  
 (35) Ibid. p. 81  
 (36) Ibid. p. 81  
 (37) Ibid. p. 137  
 (38) Feuillets 1924—1925 O. C. XIII p. 440  
 (39) S. P. (Livre de poche) p. 151

この小エッセーは『方法(V)』の続きとして書かせていただいた。ジッド作品の和訳は、新庄嘉章先生訳を参考にさせていただきました。